



アース・パスファインダーから地球を見ると — 電柱から地域／地球環境問題へ —

If the Earth is Observed from the Earth Pathfinder ; from Telegraph Poles toward Local / Global Environmental Problems

吉 田 英 生*

Hideo Yoshida

1997年7月4日、予定どおり米国独立記念日に火星に着陸したマーズ・パスファインダーから送られてくる火星表面の映像は感動的である。立場を変えて、もし、遙か彼方の星から地球探査機アース・パスファインダーが現在の日本に着陸し、その映像を母星の宇宙人に送ったとしたら、彼らはとりわけ電柱に興味を示す — このような想像を巡らせるのは筆者だけであろうか。

丸谷才一氏の随筆「電柱と電線と山車」¹⁾の冒頭は、「まず、電柱と電線の擁護論を反駁しよう。普通、あの二つの存続を説く人の論拠は、三つしかない。第一は、あれがなくなると、犬がオシッコをするのに困る。第二は、雀や鳥が困る。第三は、子供のころのことを思ひ出せなくなつて寂しい。この三つ。」と始まる。第三の論拠は、最近話題となった妹尾河童氏の「少年H」にも、要所要所で電柱がでてくることから理解できよう。

森本哲郎氏の小論「きたない」²⁾では、「まあ、通りを見てみたまえ。薄汚いセメントの電柱が林立し、蜘蛛の巣のような電線が空を汚している。(中略)もし、日本人が美しさを愛する民族だとするなら、何よりもまず、自分たちの住んでいる地域をきれいにしようとするはずではないか。まっ先に、目障りな電線を地中に埋め、醜悪なセメントの電柱のかわりに並木を植えているはずだ。」と手厳しい。

新開発の地域を除いて、この問題に真っ向から取り組んだのは、筆者の知る限りでは埼玉県川越市である。平成4年9月に蔵造りの町の電線地中化事業³⁾が完成したとき筆者は快哉を叫び、直ちに家族を引き連れ、電線のない広い青空の下、小江戸の一日を楽しんだ。

電柱問題など所詮は地域環境問題に過ぎないと思う反面、地球環境問題にも通じる重要性があるようにも

思えるのである。まず、電線地中化対策についていえば、これにともなう技術的問題はほとんどないといえるだろう。これとは対照的に、地球環境保護対策では技術的に困難な問題が山積している。それゆえに逆説的ではあるが、地球環境問題は、今後何十年間かは非技術的性格の極めて強い問題であるといえる。つまり、地域環境問題である電線地中化が進まないのも、地球環境問題への当面の対応に必ずしも最善策をとれないのも、人間の意志によるところ大である。

ここで必要とされる人間の意志とは何だろうか？ 筆者には、それは大上段に振りかぶるような性質のものではなく、人間としてもっと根源的・自然的で謙虚な姿勢の中に存するように思える。謙虚という語を加えたのは、地球環境問題に関連して最近頻繁に用いられる「地球にやさしい」という日本語に、筆者の場合、人間の驕りを暗示するような不遜な響きを感じるためである。もちろん、語感については個人差があるので、この談話室に居合わせた複数の方々から相槌をいただけるか否か、確かめてみたいと思っている。

丸谷才一氏の随筆から再度抜粋しよう。「日本人があんなに大勢、ヨーロッパへ旅行して、街や野がきれいなのに感心して帰つて来て、それにもかかはらず電柱と電線のない風景を作らうとしなかつたことほど、現代日本人の衰弱を示す事実はないと思ふ。」アース・パスファインダーを送り込んだ宇宙人が、地球全体を観察した後さらにつけ加えて言うとしたら、「地球人があんなに宇宙の神秘に感動しながら、それにもかかはらず自然に存在する万物を心から尊敬せず自分達が生息する地球の景観と環境を本気で守らうとしなかつたことほど、現代地球人の衰弱を示す事実はないと思ふ。」とでもなろうか。

引用・参考文献

- 1) 丸谷才一；軽いつづら(1996)、新潮文庫。
- 2) 森本哲郎；日本語根ほり葉ほり(1995)、新潮文庫。
- 3) 広報川越；平成4年10月10日号(1992)。

* 東京工業大学工学部機械科学科助教授
〒152 東京都目黒区大岡山2-1-2-1